様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００９２０

研究課題名（和文）環境再生デザインの公共社会学：修復的環境正義の実践的理論構築に関する研究

研究課題名（英文）"Environmental Restoration Design in Public Sociology: A Study on the Practical Theoretical Construction of Restorative Environmental Justice"

研究代表者
福永　真弓（FUKUNAGA, MAYUMI）

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・准教授

研究者番号：７０５０９２０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に戦後の跡地再生に関する資源空間史を辿り、「開発」と「生産力」のレジームが資源空間ならびに資源利用に関する社会的想像力を統治してきたことを明らかにした。とりわけ現在では、災害復興と気候危機への適応という二つの論理が「開発」・「生産力」レジームの再解釈を促し、近代未完のプロジェクトとしてのグリーン・エコノミーを構成していることを見いだした。そして、社会的排除・格差拡大のメカニズムは、自然の非持続性とではなく、むしろ自然の持続性と親密に相互作用しながら補強し合っていることが明らかとなった。これらの研究成果をもとに、修復的正義、環境倫理、ケアの倫理の交差から修復的環境正義を構想した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
環境再生がテラフォーミングに事実上拡張され、新しい生態系や地球をつくりだす、という状況にあることが実証的に確認された。同時に、それらを動かすレジームは、「未完の近代」そのものであり、とりわけ日本においては、近代化以降に何度となく再解釈・編纂されてきた「開発」と「生産力」という二つの親密に絡み合ったレジームがその中心にあることが確認された。また、テラフォーミングの途上にあるという現実は、わたしたちは再び何を自然と、あるいは惑星（地球）とイメージし、どのような倫理的境界線をひくのか、その境界線のひきかたはいかに公共的な営みとしてつくりうるか、という新しい環境倫理の課題があることが確認された。

研究成果の概要（英文）：How can we regenerate capitalistic and ecological ruins devastated by historically accumulated human activities? The reality of the earth's limits for humans to live due to climate change and biodiversity loss has elevated the question of 'how to regenerate ruins' into a global issue under sustainability. We have elucidated the analysis and evaluation methods to understand the capitalistic and ecological ruins for exploring future imaginaries for regeneration. Then, through social experiments, we explored the governance design of the regeneration of the ruins where diverse land ownerships and stakeholders intersect.

研究分野：環境社会学、環境倫理学

キーワード：跡地再生　資本主義的・生態学的廃墟　資源空間の近代史　フードテック　再生可能エネルギー　環境倫理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会的包摂と持続可能性はいかにして両立可能か。国連による持続可能な開発目標（SDGs）はこの問いへの貢献を社会学に求めているが、持続可能性は規範的基礎を共有しない未来世代を含む時空間を扱うという難題を社会学にもたらす。しかも、現代世代内での資源利用の公正さが未来世代に対する公正さを担保するとは限らず、規範的基礎が共有されていることも前提できない。「今」、この世代で、未来に必要な倫理規範や妥当な選択肢をパターナリスティックに決めざるを得ない。そのようなパターナリズムも含め、社会学の依拠する規範的基礎についての挑戦が必要になる。

そして、人工物に覆われ、ほとんどの自然が人為的影響下にある現代では、物的環境の持続可能性の実現それ自体が「デザイン」を要する。公害・開発や災害の跡地の回復・再生も含め、期待する機能や未来の可能性を想像しながら行わねばならない。それゆえ次の問題が浮上する。デザインの公共性はどう保たれ、誰がどのようにそこに参画するべきだろうか。この問いは、いかなる「自然」を想像し、人為と自然のあいだ、のぞましい自然とのぞましくない自然のあいだの、倫理的境界を設定するのか、という問いでもある。こうした境界設定を可能にする共通感覚や共通善をいかに設計することができるのかもまた問われる。

２．研究の目的

本研究では、戦後日本で繰り返されてきた戦争・公害・開発・災害に伴う再開発と環境再生を研究対象とし、事例分析から（1）自然資源生産の非持続性と社会的排除・格差構造の拡大という負のスパイラル（環境的不正義）の（再）生産のメカニズムを解明する。同時に、それを克服しようとする地域社会の（2）ミクロな日常・生業実践の中から知恵や工夫を見いだす。そして、（3）物的環境の潜在可能性を高めながら社会的包摂を実現する環境再生の仕組み、「修復的環境正義（Environmental Restorative Justice」の理論構築と制度設計を、社会実験を通じて模索し、SDGｓと社会学の接点から新たな規範的基礎・実践枠組みの提案を行うことを目的とする。

３．研究の方法

本研究の方法は大きく分けて 4 つある。

3.1 「上書き」開発の通史形成とその分析

目的（1）を明らかにするため、戦後日本の公害・被災地の環境再生と排除・格差構造の拡大について、環境・地域再生の時期区分と政策を「懐古型開発主義」と「災時便乗型・災害資本主義」に類型化し、「上書き」開発の通史形成を行う。通史形成を通じて、人びとの認識・価値、資源利用に関する想像力の変化を明らかにする。そして、繰り返される荒廃・開発による地域環境のポテンシャルの減少が、地域社会の排除・格差構造と連動して、脆弱性とリスクを高める負のスパイラル（環境的不正義）を（再）生産する過程を、通史と事例を統合的に分析しながら明らかにする。

3.2　ミクロな日常・生業実践に関する事例の質的調査

目的（2）を明らかにするため、ミクロな日常・生業実践のなかで、社会的排除・格差構造の拡大を防ぐ（あるいは何らかの形で補償する）仕組みを探求するべく、事例の質的調査を行う。

3.3 修復的環境正義の理論的探索

上記二つの分析を支えるため、修復的環境正義論の理論的探索を行う。物的環境の潜在可能性を保持・高めることと、社会的包摂性を実現することの間にどのような理論的な接続があり得るのか、同時に、そのような接続を示す事例研究についても探求する。

3.4 負のスパイラルを克服する日常・生活実践を豊穣化させる社会実験を行う。

４．研究成果

4.1 全体の研究成果

本研究の期間中は、COVID-19 の蔓延により、研究のための移動・出張に加え、高齢者の多い地域における質的調査や社会実験に支障を生じることとなった。そのため、当初の計画から研究の方法論を変更しながら、研究成果を元に研究計画を柔軟に練り直すこととなった。結果として、COVID-19 のもと、ラポール関係が既に築かれていたフィールドとの連携を強め、目的（1）の「上書き」開発の通史形成について、より時間をかけ、物質環境の潜在可能性がどのくらい変容してきたのか、その生物相の変化と共に自然科学の専門家や、生産者達のミクロな日常・生業実践の歴史的変化を調査することができた。

加えて、この時期に食糧資源の生産に関する資源利用・空間利用の再編を調査したため、COVID-19 の影響によるグローバルなフードシステム再編の波が地域社会を覆うという現象を目撃することとなった。こうした大きな力へのステイクホルダー達の対応について調査する中で、「懐古

型開発主義」と「災時便乗型・災害資本主義」を駆動する「開発」と「生産力」という二つのレジームの所在がより明確になった。この二つのレジームが、親密に絡まり合い、補強しあいながら、近代国家の編成以降、資源および空間利用を統治するレジームとなってきたこと、「懐古型開発主義」と「災時便乗型・災害資本主義」は、そのより直近の再編された形態であることも明らかとなった。そして、その形態が、現在のグリーン・エコノミーの中心におかれていること、その周辺に、本研究の当初考えていた、自然資源生産の非持続性と社会的排除・格差構造の拡大の連結構造ではなく、自然資源生産の持続性と社会的排除・格差構造の拡大という別様のメカニズムがあることが明らかとなった。また、グリーン・エコノミーを支える科学技術開発による資源空間利用の再編は、物質的環境自体の潜在可能性を組み替える「自然をつくる」局面に至っていることが明確になった。

こうした新たな研究成果を踏まえて、修復的環境正義の新たな理論フレーム形成についても、修復的環境正義とケアの倫理の交差点に一つの柱を立てることを重視することの意味がより明確となった。

4.2 「上書き」開発の通史形成とその分析

近代化以降の山林および沿岸の空間・資源開発史を、エネルギー、食糧、産業用資源（水・木材・土砂）という 3 つの柱をおいて探索し、現在にいたるまで、商品市場形成、産業の担い手のハビトゥス、自然に関する価値構造が、「開発」と「生産力」という言葉のもとで構築・再編成されてきたか。こうした通史形成については、すでに福永真弓による単著『サケをつくる人びと：水産増殖と資源再生』（2019 東京大学出版会）や、Mayumi Fukunaga, 2020, “Futuring Salmon: Dreams of Marine Ranching Amidst the Ruins of the Anthropocene,” Duke University, Durham, US, February 4.などにおいてその成果の一部が明らかにされている。また、2023 年 4 月に刊行された藤川・友澤編『環境社会学講座 なぜ公害は続くのか』（新曜社）、同じく 2023 年冬に刊行予定の福永・松村編『環境社会学講座 答えのない人と自然のあいだ』（新曜社）にも、本科研参加者によるこの通史形成とその分析に関する研究成果が含まれている。

また、「生産力」に注目した海外発表（2023, MARE）や投稿論文の査読が進んでいる。

4.3 グリーン・エコノミーという近代未完のプロジェクト

災害復興と気候危機への適応という二つの論理が、親密に支え合いながら、「開発」および「生産力」というレジームの再解釈を促し、これら二つの概念が近代未完のプロジェクトとして、グリーン・エコノミーの中心となることを可能にしていることも明らかとなった。この点について、既に言及した、2023 年冬刊行予定の福永・松村編『環境社会学講座 答えのない人と自然のあいだ』（新曜社）にその成果の一部が含まれている。再生可能エネルギーに関しては、同シリーズの 2023 年夏刊行予定になっている茅野・青木編『地域社会はエネルギーとどう向き合ってきたのか』にも含まれている。

また、福永真弓（2020）「喪失と創作：気候変動と社会実験的日常」（『環境社会学研究』26:44-59.）など、いかに近代未完のプロジェクトとしてサステナビリティ・レジームやグリーン・エコノミーという政治経済が再編されているかについても議論が進められてきた。とりわけ、自然の持続性と社会的排除・格差構造の拡大の連結構造については、後述する科学技術・産業形成の現状分析とあわせて、投稿論文と書籍刊行の計画が進んでいる。

4.4 テラ・リフォーミングとテラ・フォーミング

跡地再生にかかわる新たな科学技術・産業形成は、サステナビリティのもと、テラ・リフォーミングを「再生」概念の中心に据え、地球の限界となる境界線を、生態系の潜在能力それ自体をつくりかえることにより押し広げようとしている。この点については、福永真弓（2022）「培養肉的生と付き合う」（『現代思想』50(7): 81-93.）や、さらに消費主義症候群に関するエッセイを試みた福永真弓（2022）「弁当と野いちご：あるいはほんものという食の倫理」（『現代思想』50(2): 174-187.）に一部の成果が発表されている。また、食の倫理に関する書籍の刊行が予定されている。

その他の成果については、引き続き取材内容の分析を必要とするほか、いわゆる ELSI や RRI など、研究倫理の社会実験に深く関わる研究に拡大されている。この研究内容については、新しい研究資金に応募し、あらためて学際的な研究として開拓する予定である。

4.5 修復的環境正義の新たな理論フレーム形成

ケア倫理も念頭に置いた環境正義の拡大と惑星倫理の結びつきについては、福永真弓（2023）「魚のまなざす海：多種間の政治と人間であること」（『政治思想研究』23: 118-143.）で一部論じられた。また、福永真弓（2022）「リスクを「わたくしごと」化させる文法に抗うために」（『社会学年報』51: 21-33.）、福永真弓（2022）「感染症と食をめぐる「遅い暴力」」主題別動議『感染症（後）社会の倫理学』（第 73 回日本倫理学会大会, 2022 年 10 月 2 日, 慶応義塾大学）では、東日本大震災という災後、COVID-19 によるフードシステム再編の現場における社会的排除・格差構造についての現状分析がなされた。

また、修復的環境正義の理論的描写については、現在投稿論文と書籍の分担執筆が進んでいる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 福永真弓	４．巻 9
２．論文標題 サステナビリティと正義：日常の地平からの素描からの理論化にむけて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 サステナビリティ研究	６．最初と最後の頁 133-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福永真弓	４．巻 83(1)
２．論文標題 自然と人間の互酬的かかわりとは何か：遊び仕事からの模索	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ランドスケープ研究	６．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮内泰介	４．巻 25
２．論文標題 複数的資源管理の議論のしかたはどうあるべきか－北島義和著『農村リクリエーションとアクセス問題－不特定多数の他者と向き合う社会学』を読む	５．発行年 2019年
３．雑誌名 環境社会学研究	６．最初と最後の頁 219-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Maruyama, Yasushi	４．巻 2019
２．論文標題 Am Fue des Leuchtturms ist es dunkel ber die Akzeptanz erneuerbarer Energien in Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JAHRBUCH FR NATURVERTR 196;GLICHE ENERGIEWENDE 2019	６．最初と最後の頁 150-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田涼都・ハスプロジェクト推進協議会・吉田丈人	4．巻 8(0)
2．論文標題 自然に対する多様な価値づけについての空間明示的な調査手法と成果の活用についての可能性と課題 －福井県三方五湖における「昔の水辺の風景画」募集活動の検討から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 野生生物と社会	6．最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Meguro Toshio	4．巻 40(2&3)
2．論文標題 The unchanged and unrepresented culture of respect in Maasai Society	5．発行年 2019年
3．雑誌名 African Study Monographs	6．最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 友澤悠季	4．巻 47(13)
2．論文標題 公害・環境分野における法令順守の課題―被害をなきものとしない社会的責任に向けて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 83（1）
2．論文標題 自然と人間の互酬的かかわりとは何か：遊び仕事からの模索	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 9
2．論文標題 サステナビリティと正義：日常の地平からの素描からの理論化にむけて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 サステナビリティ研究	6．最初と最後の頁 133-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 富田涼都	4．巻 68(3)
2．論文標題 生物多様性の保全をめぐる科学技術コミュニケーションのあり方	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本生態学会誌	6．最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18960/seitai.68.3_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 友澤悠季	4．巻 80
2．論文標題 公害が問うた前衛と科学―年代論を避けながら	5．発行年 2019年
3．雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	6．最初と最後の頁 52-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸山康司	4．巻 45（10）
2．論文標題 風力発電による環境影響と解決策（巻頭特集 風力発電について考える）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 環境と測定技術	6．最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸山康司	4．巻 88（10）
2．論文標題 再生可能エネルギーの導入と地域の合意形成 ： 課題と実践(特集 再エネ ： 地域社会の再生へ)	5．発行年 2018年
3．雑誌名 科学	6．最初と最後の頁 1010-1015
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大倉季久	4．巻 9
2．論文標題 脱市場社会のサステイナビリティ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 サステイナビリティ研究	6．最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鬼頭秀一	4．巻 168
2．論文標題 自然と共生する技術とは何か　有明海の再生に向けて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ACADEMIA	6．最初と最後の頁 16-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鬼頭秀一	4．巻 14
2．論文標題 人と自然のかかわり再考-- 「自然災害」との共生に向けて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共生科学研究	6．最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　6件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 Mayumi Fukunaga
2．発表標題 Aqua culturing the coast in the Anthropocene: Beyond the science-technological imaginary of marine ranching in the ruins
3．学会等名 15th International Conference on the History of Science in East Asia, Chonbuk National University, Jeonju, Republic of Korea（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Mayumi Fukunaga
2．発表標題 Bunake stories: Japanese salmon fishers and the [re]becoming futures of place- and community-based salmon
3．学会等名 The Annual Joint Conference of the Association for the Study of Food & Society (ASFS) & Agriculture, Food and Human Values Society (AFHVS) at the University of Alaska Anchorage in Anchorage, Alaska.（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Mayumi Fukunaga
2．発表標題 Living as the fishers in the city: Unfolding ontology of urban water for co-imagining a livable coast for shrimp
3．学会等名 The International Symposium for Society and Natural Resources and Management, University of Wisconsin, Oshkosh（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 宮内泰介
2．発表標題 被災地住民にとってのコミュニティ再編とその重層
3．学会等名 第59回環境社会学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 宮内泰介
２．発表標題 ライフヒストリーから見るイワシ産業の地域史：長崎県雲仙市南串山町の事例から
３．学会等名 地域漁業学会第61回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasushi Maruyama ad Makoto Nishikido
２．発表標題 Driving Motivations for Energy Transition: Case Study of Community Power and Green Electricity in Japan
３．学会等名 7th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia (ISESEA) 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 TOMITA Ryoto
２．発表標題 Conflicts among stakeholders over the use of the coastal seascape due to discordance on the issue of "productivity":A case study of the post-war experience of the Sakura Shrimp (Sergia lucens) fishery in Suruga Bay, Japan
３．学会等名 15th International Conference on the History of Science in East Asia (ICHSEA)、Chonbuk National University・Jeonju・Koria（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 福永真弓
２．発表標題 喪失と創作：気候変動と社会
３．学会等名 第60回環境社会学会大会シンポジウム『気候変動と専門家』 、明星大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 富田涼都
２．発表標題 気候変動の「環境問題」における社会的受容：その「遠さ」を考える
３．学会等名 第60回環境社会学会大会シンポジウム『気候変動と専門家』 、明星大学（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 目黒紀夫
２．発表標題 第4回マサイ・オリンピック：変わったものと変わらないもの
３．学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 目黒紀夫
２．発表標題 イベント化する野生動物保全における『スペクタクル』の表象：ケニア南部、マサイ・オリンピックの事例研究
３．学会等名 第60回環境社会学会大会、明星大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayumi Fukunaga
２．発表標題 Negotiating ‘generativity’ among human and non-human actors: Re-organizing aquaculture in social- ecological restoration of the contaminated and devastated coastal spaces in the post-war Japan
３．学会等名 XIX International Sociological Association Conference 2018 Toronto（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayumi Fukunaga
２．発表標題 Resisting nostalgic developmentalism: (Re)generative commons as a new nexus for sustainability and restorative environmental justice in post-disaster Japan
３．学会等名 XIX International Sociological Association Conference 2018 Toronto（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayumi Fukunaga
２．発表標題 Re-wilding aquaculture: Negotiating and re-imagining seascape in collaborative local knowledge production and action in Miyako Bay
３．学会等名 Resilience and local knowledge workshop in Japan, UC Berkeley（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Taisuke Miyauchi
２．発表標題 Rural Community Sustainability and the Commons: A Post-Disaster Experience
３．学会等名 XIX International Sociological Association Conference 2018 Toronto（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 富田涼都
２．発表標題 環境問題をめぐる「オープンサイエンス」の実践の意義
３．学会等名 「野生生物と社会」学会第24回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 友澤悠季
２．発表標題 1970年代初頭日本の公害反対・環境保全をめぐる運動状況 ―全国的把握に向けた方法と課題
３．学会等名 第57回環境社会学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motosu, Memi and Yasushi Maruyama
２．発表標題 Local acceptance of wind energy projects in a community without negative campaign
３．学会等名 Grand Renewable Energy 2018 International Conference and Exhibition（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nishikido, Makoto and Yasushi Maruyama
２．発表標題 Energy Transition and the Development of Community Power Movements in Japan
３．学会等名 XIX International Sociological Association Conference 2018 Toronto（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 丸山康司
２．発表標題 再生可能エネルギー事業の環境アセスメントと社会的合意形成
３．学会等名 平成30年度自治体向けアセス条例研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yasushi Maruyama
２．発表標題 Energy Transition and Community Power Movements in Japan
３．学会等名 I2CNER International Workshops（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鬼頭秀一
２．発表標題 当事者研究の意義と課題
３．学会等名 日本共生科学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鬼頭秀一
２．発表標題 いま改めて、共生の在り方を考えるー3.11以後の環境問題と環境正義
３．学会等名 日本共生科学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鬼頭秀一
２．発表標題 自然と共生する技術とは何か　有明海の再生に向けて
３．学会等名 地球システム・倫理学会・全日本学士会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

1．著者名 福永真弓	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 498
3．書名 サケをつくる人びと：水産増殖と資源再生	

1．著者名 宮内泰介	4．発行年 2019年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 479
3．書名 パブリック・ヒストリー入門－開かれた歴史学への挑戦（菅豊・北條勝貴編著,「『八重子の日記』をめぐる歴史実践」を分担執筆）	

1．著者名 SAITO Osamu (Ed.) Sharing Ecosystem Services Building More Sustainable and Resilient Society	4．発行年 2019年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 -
3．書名 TOMITA Ryoto, Hasu Project, YOSIDA Takehito, Sharing Ecosystem Services Building More Sustainable and Resilient Society (Sharing Experiences and Associated Knowledge in the Changing Waterscape: An Intergenerational Sharing Program in Mikatagoko Area, Japan)	

1．著者名 福永真弓	4．発行年 2019年
2．出版社 人間文化研究機構総合地球環境学研究所ブックレット	5．総ページ数 69
3．書名 被災地における『つなげようとする』意志を読み解くために（羽生淳子編、『レジリエントな地域社会 地域のレジリエンスと在来知』を分担執筆）	

１．著者名 Taisuke, Miyauchi	４．発行年 2018年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 430
３．書名 Transformations of Social-Ecological Systems: Studies in Co-creating Integrated Knowledge Toward Sustainable Futures (Sato, T., Chabay, I., Helgeson, J. eds., "Adaptive Process Management: Dynamic Actions Toward Sustainable Societies"を分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丸山　康司 (MARUYAMA YASUSHI) (20316334)	名古屋大学・環境学研究科・教授 (13901)	
研究分担者	富田　涼都 (TOMITA RYOTO) (20568274)	静岡大学・農学部・准教授 (13801)	
研究分担者	宮内　泰介 (MIYAUCHI TAISUKE) (50222328)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	友澤　悠季（西悠季） (TOMOZAWA YUUKI) (50723681)	長崎大学・水産・環境科学総合研究科（環境）・准教授 (17301)	
研究分担者	大倉　季久 (OOKURA SUEHISA) (90554147)	立教大学・社会学部・教授 (32686)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	目黒　紀夫 (MEGURO NORIO) (90735656)	広島市立大学・国際学部・准教授 (25403)	
研究分担者	鬼頭　秀一 (KITOH SHUICHI) (40169892)	星槎大学・共生科学部・教授 (30124)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関